［3］

氏　　名	前原（まえはら）　あやの
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第 213 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	中国古代天文学思想の研究 ―張衡を中心として―
論文審査委員	主査　教授　吾妻　重二 副査　教授　井上　泰山 副査　教授　二階堂　善弘 専門審査委員 元教授　橋本　敬造(関西大学名誉教授)

論文内容の要旨

前原あやの氏の論文「中国古代天文学思想の研究―張衡を中心として―」は、後漢の天文学者である張衡（78～139）を中心として、中国古代における宇宙論や星座の知識について実証的に究明したものである。

内容構成は以下のとおりである。

序　章
第一部　張衡と渾天説
　第一章　「渾」の用法に見る渾天説の原義
　第二章　『霊憲』と『渾天儀』の比較
　第三章　渾天説の天文理論
　第四章　渾天説と尚水思想
第二部　中国古代の星座観をめぐって
　第一章　中国の星座分類の変遷
　第二章　詩・賦に見える星座の配列
　第三章　張衡の星座の知識をめぐって
　第四章　『海中占』関連文献に関する基礎的考察
附　　『海中占』の輯佚
補　章　張衡と占術
終　章
主要参考文献
初出一覧

第一部「張衡と渾天説」では、中国の宇宙論の一つである渾天説と張衡の天文学説が論じられる。

第一章「「渾」の用法に見る渾天説の原義」では、なぜ渾天説に「渾」の字が用いられたかの理由が究明される。後漢までの「渾」の多くの用例を精査し、渾天説の原義として、①水の流れに繋がる動的なイメージをもち、窮まりなくめぐる天の運行を表現した、②原初的、一なるものとしての未分化な状態を表現した、という二つの意味があるとし、「渾天」の意味が時間的・空間的な次元を含む、天地一体の世界を最大の特徴としていたと結論づける。また現在、渾天説の特徴と考えられている球状の天は、張衡によって提示されたものであるとする。

第二章「『霊憲』と『渾天儀』の比較」では、『渾天儀』の著者について考察がなされ、さらに張衡の天文学関係の著作『霊憲』と『渾天儀』の後世における受容についても比較が行われる。まず作者問題について、『渾天儀』を張衡の著作とする旧説に対し、多数の佚文と引用時の書名とをあわせ比較して、『渾天儀』は張衡が著わした部分と、張衡の意思を受け継ぐ後学の手になる部分とに分けられると結論づける。次に、後世における受容に関しては、両書の扱いの相違は成書目的の違いから来るとする。すなわち『霊憲』は渾天説の理論的記述であるのに対し、『渾天儀』は天文観測儀器の渾天儀の構造、使用法が中心の記述であったため、後世、扱いの差を生んだという。

第三章「渾天説の天文理論」では、まず張衡の渾天説において地は球状ととらえられていたのかという問題が検討される。地の形状に関するとされる記述は、第二章で張衡以外の人物によって書かれたと判断される部分に含まれ、その内容も明確に球状と主張しているわけではないため、張衡は球状の地の概念を持っていなかったと結論づける。次に、『霊憲』の天文理論と他の思想的文献の内容の継承・発展の関係についても考察され、『霊憲』が『周髀算経』や『淮南子』などの内容を継承していること、その一方で、張衡は先行の知識を継承した上で実際に天体を観察し、「蜆」や「両儀」など自身の言葉でそれらを独自に表現していたと指摘する。

第四章「渾天説と尚水思想」では、諸子文献、特に道家系文献に見られる水に関する記述を整理し、『霊憲』の記述と比較することで、渾天説の思想的背景に水を尚ぶ尚水思想があることを論じた。さらに、天・地・水を並列する『霊憲』の記述方法は、のちの五斗米道の三官信仰に通じるという興味深い指摘を行っている。宇宙構造論と道教の三官信仰との関わりは今後、天文学思想を考える上で重要な視点であるという。

第二部「中国古代の星座観をめぐって」では、中国における星座分類の変遷を考察するとともに、張衡の星座の知識、さらに『霊憲』で言及される「海人之占」について論じられる。

第一章「中国の星座分類の変遷」では、天文関係類書や正史の天文志その他の星座配列から、分類に複数のバリエーションがあること、しかし主に天の北極を中心とする中宮・三垣分類と、三人の人物（石氏、甘氏、巫咸）の名を用いた三家分類の二つの大きな流れがあることが指摘される。また、こうした分類の多様化の要因については従来、時代ごとの分類の変化という一面のみが注意されてきたが、星座分類の変遷を精査すると、一概にそうはいえないことは明らかだとして、分類の変化の主な要因として、①成書目的の相違、②インドや他国から天文学が伝わったこと、③依拠する宇宙構造論の相違、の三点を挙げる。特に①について、中宮・三垣の分類が正史の天文志を中心に確認できるのに対し、占星術のために編纂された天文類書は、二十八宿を主とするもの、三家分類の双方が確認で

きるという事実を指摘している。

第二章「詩・賦に見える星座の配列」では、星座についてうたった詩賦の星座配列を確認する。そして、天文書では『史記』『漢書』以後は見られなくなった五宮の分類が「観象賦」や「渾天賦」などに詠みこまれ、唐代まで用いられていたことを明らかにしている。また「歩天歌」や「玄象詩」はそれぞれ異なる順序のテキストがあり、同じ詩賦でも星座の配列が改変される例があること、その時々に人々が利用しやすいよう順序を入れ替えていたことも明らかとなった。また敦煌から発見された「玄象詩」を取り上げ、欠けている前半部分の星座配列を推測し、配列がどのような星座分類にもとづくのかを考察している。

第三章「張衡の星座の知識をめぐって」では、張衡の『霊憲』と「思玄賦」に見える星座の記述から、漢代に星座がどのように分類されたのかを検討し、張衡は紫宮と太微に主眼を置き、中央と四方の五宮分類を踏まえていたとする。また、『通志』天文略などに引用される張衡のものとされる星座に関する佚文は、実際には張衡のものではなく、「天文大象賦」（張衡の作とされることがある）の注と重なる記述であることから、張衡の語と見なされたのであろうと推定している。

第四章「『海中占』関連文献に関する基礎的考察」では、『霊憲』の星座に関する記述の中にある「海人之占」に関わるとされる『海中占』について、基礎的考察を行なった。『海中占』はこれまで、南方で書かれた天文書であるとか、航海に関わる天文書であるなどの解釈があったが、佚文を網羅的に整理・検証した結果、中国内部で書かれ、蓬萊をはじめとする三神山と関わる文献であることが明らかとなった。つまり『海中占』は、三神山の伝承が伝わる燕・斉の方士が作成した天文書とされたと考えられるという重要な指摘を行っている。また附録として、数多くの文献から輯集、整理した『海中占』の佚文約八三〇条を載せている。

補論「張衡と占術」においては、張衡の占術に関する記述、讖緯思想に対する見解が整理される。張衡は讖緯思想を否定した人物とされることが多いが、実際は讖緯思想の恣意的な解釈や曲解を否定しているのであって、讖緯思想そのものを否定しているわけではないとする。『霊憲』や「思玄賦」には、易占や亀卜、占夢、帰蔵（易に類似する占い）の記述があり、「請禁絶図讖疏」では、律暦や卜筮、卦候、九宮、風角などの占いを容認する。これらに共通する暦や星、数に関わるという点を張衡は正統ととらえて重視し、将来を見定める際に重要なものであると考えていたとする。

論文審査結果の要旨

前原氏の論文は、後漢の張衡を中心に中国古代の天文思想を数多くの関連資料を博捜して実証的に考察したものであり、宇宙論、天文学、水の思想、星座、占星術など多方面にわたる意欲的な内容となっている。重要な成果としては主に次の四点があげられる。

第一に、張衡の渾天説に関する包括的な考察がある。「渾」の文字のもつ意味や中国古代に流布した「水」の思想の検討は、渾天説という宇宙理論のもつ内容や思想的背景、イメージを浮き彫りにするのに成功していると思われる。また、その検討にもとづき、張衡が地球を球体とは考えていなかったとし、従来の地球説の誤りを指摘したことも重要である。

第二に、『渾天儀』の作者に関する解釈である。『渾天儀』は佚書であり、現在、その佚

文によって原書の形が再構成されうるわけであるが、それは張衡自身が著わした部分と、張衡の学説を受け継ぐ後学の手になる部分とに分けられるという。この結論は、詳細に輯められた関係佚文にもとづく分析の結果としてきわめて説得力をもっており、学界に一石を投じるものといえよう。

第三に、中国古代の星座に関する詳しい検討である。『史記』や『漢書』、『晋書』を初めとする正史、『開元占経』や『霊台秘苑』、『天文要録』などの天文類書、さらには「観象賦」、「歩天歌」、敦煌文書の「玄象詩」などの詩賦を広くとり上げ、宇宙構造や文献ごとに星座分類にさまざまなバリエーションがあることを明らかにしている。このように、天文書の成書目的によって分類が異なるという見方はこれまでほとんどなされておらず、今後の天文学研究の上でも重要な指摘といえる。

第四に、『海中占』の研究および輯佚がある。張衡の『霊憲』に言及される「海人之占」およびそれに関連する『海中占』なる文献がいかなるものなのか、従来諸説があって一定していなかったが、輯集佚文による内容の分析により、「渤海の海中にあるという三神山の伝承が伝わる燕・斉の方士が作成した天文書」を意味するものであると論断している。これに関連して、同文献につき網羅的な輯佚と校勘を行っていることも重要である。

これらの成果はいずれも論拠に裏づけられた手堅い論証の結果導き出されたものであり、張衡および中国古代の天文学思想の研究に貢献しうる内容となっている。

もちろん、残された問題もある。たとえば、張衡は『文選』に多くの詩賦を伝える重要な文学者でもあったこと、同時代の占術に対して容認的態度を取っていたことなどは、張衡が今日いう「天文学者」とは違い、漢代の思想・文化に棹さす知識人であったことをよく物語っている。そのような時代思潮の中に張衡の天文学思想をどのように位置づけるかは広く中国の科学思想というものを考える場合、考究する必要があるであろう。しかし、それは今後の課題というべきであり、本論文は天文学の分野において従来の研究に新たな知見をつけ加えているということができる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。